FLOWER

雛丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＬＯＷＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ４０７０Ｋ

【作者名】
雛丸

【あらすじ】
神々に守護された国、アルタシオ帝国。
その国は長きにわたって栄え、平和なはずであった。
しかしある時から神々の怒りを買い、瞬く間に空前の危機に陥った。
異端とされる部隊に属す少年イオ。
彼が恐竜に跨り、大変動の時代を駆け抜けていく…。

大地揺れる

幾千年もの時を経て磨き抜かれた独自の文化が荘厳な光を放ち、大地の神々の国と最も近く、その守護を受けている国、アルタシオ帝国。この国を囲む深い溝は神々のまします場所であり、その神々との誓いを守るため執政をするのが王家である。イオが属しているのは王家を支える機関のうち最も新しく重要な機関であったが、同時に異端でもあった。

「イオ、今夜は新月だから奴等はいつもより活発だ。それに寒いが、奴等には関係ないようだからな。気を付けろよ」

緑色の瞳を細めてナギノがイオの肩を叩いた。その反対側の肩を叩いたのは、紅色の瞳をもつカナタだった。二人は双子である。

「イオにも寒さは関係ないって。カンは鋭いが、あとは本当に鈍いからな」

「頑張ります。二人も気を付けて」

二人はそれぞれ頷いてみせ、城門を出て左右に分かれた。残されたイオはフィックの背に跨り、歩くよう促した。フィックは深緑の身体を持つ恐竜である。イオが属しているのは恐竜を御する部隊であり、アルタシオ帝国ではあってはならないはずだった。なぜなら、この国では恐竜は忌むべきものとされているからだ。しかし、今はやむを得ない事情があった。神々がここ数年荒れており、夜になると「精霊」が現れるのだ。精霊は何をするわけでもないが、凶事の前兆だと人々に噂され、かつて揺らいだことのない王家の絶対性を危うくしているのだ。そこで王家は苦渋の決断をして、精霊の嫌う恐竜を扱える人材を探して雇い、夜の警備を行わせているのである。それがイオの属している特別隊であった。

イオも城門を出ようとすると、朗々とした声に呼び止められた。振り向くと、そこには友人のアロットがいた。

「つれないなあ、イオ。私の贈ったマントを使ってくれていないと

は」
「マントなら使っているさ。フィックが」
イオは自分の跨っているフィックの背を指した。つまり、イオは深紅のマントの上に座っていた。
「私は君と揃いのマントにしたつもりなのに。ところで今夜はどこの担当なんだい？」
アロットはイオの隣に並び、親しげに問いかけた。彼も恐竜に乗っている。
「俺は国境の担当のはずだけど。どうかしたのか」
それがどうした、とイオが尋ねると、アロットは罰の悪そうな顔をした。
「あの男が場内をうろうろしていてね…。どうも居心地が悪いんだ。私が国境まで行くから、イオが城内の警備をしてもらえないだろうか」
あの男とはアロットの実の父親で、大貴族であるファイデリー家の当主だ。この親子は極めて不仲なのだ。
「気持ちはわかるが、国境は精霊の数がすごいぞ。大丈夫なのか」
「おや、私を侮らないでほしいものだ。剣術では君に負けないつもりだぞ」
それはそうだが、とイオは目を逸らした。理由は分からないが、アロットにはよく精霊が付き纏う。その浮世離れした容貌のせいなのか、祭司の血を引いているからなのか。しかもアロットは精霊を好かないようで、城内では顔がきくということもあり、隊長にはいつも城内の警備を任されている。
「とにかく、私はあの男を視界にいれるくらいなら国境へ行く。それに案外、城内の担当は君のほうが適任かもしれない」
アロットの言葉にイオが怪訝な顔をすると、アロットは顔を近づけ、まじめくっさた声音で言った。
「君はご婦人方や妙な連中の間で、かわいい目鼻立ちをしていると評判なんだ」

「馬鹿馬鹿しい」
イオは溜め息とともに目だけで城門を見て、アロットに行くよう促した。
「行ってしまえ。その代わり、あとで泣きつくのも夢でうなされるのもなしだからな」
「愛情表現が下手だな、君は。気を付けて行ってくるから安心したまえ」
満足そうに言うと、アロットは深紅のマントを翻して城門を颯爽と出て行った。その後ろ姿を見送ると、イオは巡察を開始した。月明かりこそないものの、必要以上に灯されたランプと王家の神殿から漏れる明かりによって、庭はとても明るく、イオには眩しくさえ感じられた。
（夜にも神殿では祈りが捧げられているのか）
白く幻想的に浮かび上がる建物を横目に見ながら通り過ぎた。この国の出身ではないイオは神々にさほど敬意を払う気になれず、神殿に足を踏み入れたことはなかった。それに、もしイオが粛々とした気持ちで神殿に入ったとしても、特別隊に属する以上、卑しいものを見るような視線を浴びるのは必然だった。
外を歩いているのは祭司ばかりで、時折もやのように漂っている精霊の姿が見受けられた。おかしなものだとイオは思った。神々を信仰し、敬っているはずの人々なのに、精霊を恐れて夜間はほとんど外出しない。それなのに、その精霊を監視している特別隊には露骨な敵意を向ける。隊長はそんなものだと肩を竦めてみせていたが、イオには解せなかった。
（人間ての方は都合のいい生き物だな）
フィックの首を撫でてやると、答えるように一声小さく鳴いた。フィックを弟のように思っているイオは、恐竜が忌まわしいと思われていることも理解できなかった。
イオの視界に馬を駆る祭司の姿が入った。イオは足でフィックに合図をして、その人物を追った。夜に馬で駆ける祭司など不審すぎ

る。足の速いフィックは、慣れない手つきで手綱をさばくその人物にすぐに追いついた。イオがその腕を乱暴に掴むとその人物は息をのみ、恐竜に怯えた馬が突然止まると、振り落とされそうになりながら非難の声をあげた。
「何ですか、危ないな」
ローブを着ていて口元しか見えなかったが、声の調子でかなり若い男だとわかった。
「どちらへ」
イオが鋭い口調で問うと、男はすぐに平静を取り戻して言った。
「どこの誰かは尋ねなくていいのですか」
「聞いてほしいのか」
思いもよらない発言に困惑しながらも強気に言うと、男はくつくつと笑った。
「まさか。君は面白いね。でも、生憎と君と話す時間はなくて。その手を離してくれませんか。どう考えても、力では君に勝てない」
馬鹿にされた気がしてイオは男を睨んだ。イオに掴まれているのに、どこか余裕の態度をみせるこの男が気にくわなかった。
「俺はお前を連行する。力ずくででも」
手に力を込めると、男は「いたた」と呻いた。驚くほど細い腕だった。
「僕に時間をとられていては駄目ですよ。僕は悪事を働いたわけじゃない」
イオが男に詰め寄ろうとした時だった。ごおお…と地鳴りがした。灯されていたランプが次々と消えていく。神殿の光も消えた。それでも明るい。それは、いつのまにか数を驚くほど増やした精霊が白い光を放っているからだった。
イオが呆気にとられていると、その隙に男はイオの手を振りほどき、怯えを増す馬に鞭をいれて駆けだした。慌ててイオが追おうとすると、実態の―もやのようではない―精霊が横切った。イオの耳に鳴りやまない地鳴りと遠ざかる男の声が聞こえた。

「いつか僕の研究所に来てください！この国が転覆する前に、花の乙女と！」
「それはどういうことだ！」
飛び交う精霊のせいで男を追えず、イオは怒鳴った。しかし、気味の悪いほどテンポよい蹄の音以外は聞こえず、それもやがて聞こえなくなった。
「くそっ」
苛立ちを感じたが、それどころではなかった。地鳴りは続き、精霊は増え続けている。何事かと神殿や城から出てきた人々は度肝を抜かれ、悲鳴も出ないようだった。イオがフィックをけしかけてみても、精霊は無視して飛び回り続けた。どうしたものか、イオが内心焦りを感じていると、祭司の長でアロットの父親であるファイデリー家当主ディルノがずんずんと歩いてきた。そしてイオの目の前に来ると、祭司にはふさわしくないすごい形相をした。
「何をしている！このような事態の時のためにお前たちがいるのではなかったか！」
何も言い返すことができずイオが黙っていると、ディルノは辺りを見回し、少し冷静になって言った。
「私の息子はどこた。祭司は嫌だと家を飛び出し、官吏になるならまだしも、望んで軍人に、しかも特別隊などという部隊に志願した私の馬鹿息子は」
ディルノの口からアロットのことを聞くとは意外だった。しかも心配しているふうに思われる。どうやら父親は息子を心底嫌っているわけではないらしい。そうなるとなおさら、アロットが最も危険そうな国境に行ったとは言いにくかった。
（そういえば、アロットは大丈夫なのか？）
イオの不安はすぐにディルノにも伝わった。だが、彼はその不安を表情に出すことなく、冷静な声音のまま、もっともな疑問を口にした。
「これは一体何事だ…」

「俺にもわかりません」
誰にもわかるはずがなかった。そもそも精霊が現れることも、どんな史書を読み漁ってみても見つからなかったのだから。
―地鳴りがやんだ。精霊は動きを一斉に止めた。みな、同じ方向を大きな瞳で見つめている。月のない星空の下、長い長い栄華を誇りそびえ立つ城を。その城の最上階で、アルタシオ帝国全土を見渡すことのできる唯一の場所、王の寝室を。
奇妙な沈黙の時が流れた。いや、時間など存在していなかったのではなかろうか。世界のすべてが止まっているように思われた。しかし、イオは自分の心臓がひとつ大きく鼓動をうったのがわかった。全身の血が冷えた後、急速に燃える。久しぶりの殺気であった。
イオが抜刀するのと精霊が動き出したのは、ほぼ同時であった。イオはディルノのことを忘れ、フィックとともに城の玄関を突破した。門番や兵士はすべて、及び腰に逃げ腰である。しかし、そんなことはどうでもよかった。今はただ、精霊よりも先に城の最上階に辿り着かねばならない。
フィックはものすごいスピードで階段を登っていった。どれだけ金を積んでも買えないような立派な絨毯に足跡がついていったが、それは考えないことにした。イオが破った入口から入った精霊がイオを追い抜こうとすれば、剣で容赦なく斬り捨てた。それを目撃した侍女たちは、こんな状況にもかかわらず、「なんと罰当たりな」と悲鳴をあげたり気を失ったりした。
しばらくの間登り続けると、屋上に出た。冷たい冬の風が、熱くなったイオの頬を撫でていく。王の部屋へはここからまた階段の登らねばならなかったが、時間がなかった。精霊がイオの横を上昇していくのが見えた。イオは剣をおさめた。
「フィック、行こう」
イオが一言発すると、フィックは跳躍して壁のひびに爪を引っ掛け、また跳躍した。階段を使うより、こちらのほうが何倍も速い。イオは落ちないようにフィックの首をしっかりと抱き、ただ王の部

屋を目指した。
バルコニーに辿り着き、フィックの背から降りた時だった。
「父様、父様！」
室内から泣き声に近い叫びが聞こえた。イオは再び剣を抜いて窓に駆け寄り、そのままの勢いで柄を使って窓を割った。白いカーテンが吹き込む風に揺られ、室内の青白い光が外に漏れた。イオは破かんばかりの剣幕でカーテンを払いのけて部屋に入った。嫌な汗がずっと背中に流れている。
目に入ったのは精霊と剣を握りしめたまま座りこんだ少女、そして男の右腕だけだった。その男―アルタシオ帝国国王は娘の目前で、精霊によって床を通じた闇へと引きずり込まれつつあった。そこにまるで穴があるかのように。王女の目は恐怖で見開かれ、剣を握った腕はかたかたと震えている。
「陛下！」
その信じがたい光景に一瞬茫然としたが、すぐに走って王に群がる精霊を斬り捨てた。もうすでに右手首から上しか見えていなかった。その手をしっかりと握ると、王が握り返しているのがわかった。
「陛下、今お助けします！どうかご辛抱を！」
汗で滑る手で懸命に王の手を引っ張った。そんなイオの周りを精霊はくるくると飛んでいる。イオは必死だった。王だからではなく、イオの助けを求める人間だからどうしても救いたかった。しかし、ついに王の指が床下へ沈み、一人の人間が闇に消えたのだった。
（間に合わなかった…）
床に膝をついたまま、イオは絶望感に打ちのめされた。すっと冷めていく汗のせいなのか、寒いと思った。そのせいで、精霊の次の動きに気付くのに遅れた。次の標的は王女だ。
（しまった！）
気付いた時には、もうすでに王女は取り囲まれていた。精霊をかき分けていくと目に入ったのは、気丈にも剣を振り回して戦っている王女の姿だった。彼女はイオと目が合うと、鋭い視線をよこした。

「何をしているのですか。しっかりなさい！」
先ほどまで座りこんでいた少女とは別人のようで、見事な剣さばきだった。イオは舌を巻く思いで気持ちを切り替え、剣をふるった。そして、王女の腕を掴んだ。
「早く逃げましょう」
二人は走ってバルコニーに出た。それはちょうど、翼竜によって滑空してきたカナタが着地した時だった。
「イオ、大丈夫か。遅れて悪かった。城下も大変なんだ」
顔を煤だらけにしたカナタが二人に歩み寄った。その様子から火を用いたのがわかった。
「奴等は火が苦手みたいだ。さあ、俺も手伝うぜ。何をすればいい」
カナタは肩まで伸ばした黒髪を束ねながら言った。その目は飛び交う精霊を睨んでいる。イオは王を救えなかった無念さでくやしくて仕方なかったが、今はまだ後悔する時ではないと判断した。
「王女様を頼みます。カナタさんの方が速い。俺は城内を見回りながら降りる」
つとめて平静な声をだしたが、この時点でイオが王を助けられなかったことは明白だった。しかし、カナタはさほど気にした風もなく、「失礼しますよ」と言って王女を抱えた。飛び立つ直前に王女はイオを見た。
「くれぐれも気を付けて」
イオは深く礼をしてフィックに跨った。ふと思い当り、カナタに尋ねていた。
「アロットは」
「隊長が合流しているはずだ。心配するな」
ほっと胸を撫で下ろしながら、イオはカナタの後ろ姿を見送った。王女を狙ってその後を追おうとする精霊を斬りつけ、イオは来た道を引き返した。
どうやら精霊は限られた人間にしか興味を示さないらしい。被害者はいないかとイオは注意しながら階段を下りて行ったが、精霊は

数こそ多いものの漂っているだけで、人々は怯えているだけだった。また、人々の恐怖の対象はイオでもあった。神々の化身とも言われている精霊を躊躇なく斬り捨てていく若者は、悪魔のように思われても仕方なかった。結局、王家の庇護によって特別隊は存在しているに過ぎないのだ。その筆頭である王が消え、残されたのはイオとあまり年の変わらない王女だけ。混乱が生じるのは必然だった。

突然フィックが足を止めた。もうすぐ長い階段が終わろうとしていた時だった。

「どうしたんだ、フィック」

驚いて話しかけると、フィックは一声小さく鳴いた。その内容を理解したイオは、フィックの好きなように行かせることにした。イオは恐竜の言葉がわかった。それは育った環境で身に付いたものである。

フィックは時々立ち止まりながらも、どんどん城の奥へと進んでいった。いくつかの豪華な応接室を通り抜ける。誰も通らないような回廊を通ると、壁にかけられた肖像画の偉人達がイオを品定めしているように思われてならなかった。ここまで来ると精霊の姿はない。奥に進んでいくにつれて、イオは不思議な感覚を覚えていた。恐怖と懐かしさ、そして好奇心。今追っている何かを見つけてはならない気がしたが、どうしようもなく惹かれた。

行きついた先は行き止まりだった。そこでフィックはまた一声鳴いた。イオは反射的に頷いていた。フィックは小柄な身体にしては太い脚で、古びた壁を思い切り蹴った。二、三度繰り返すと、ついに壁が崩れた。イオはフィックの背に乗ったまま、その穴をくぐった。

（ああ、これは山野の香りだ…）

その隠されていた小部屋に入って、イオは自分とフィックを惹きつけていたものの正体を知った。それは、故郷の山野と緑の気配だった。そしてその源はきょとんとした少女だ。

「…誰？」

ランプの隣に座っている少女が目を丸くして尋ねた。予想外のことに驚いていたイオはなんとか言葉を発しようとしたが、それは迫りくる殺気でかなわなくなった。神経を尖らせるイオに少女が告げた。

「助けて」

彼女はいつのまにか隣に立っていた。その顔は無表情であったが、声には切実な響きが込められていた。

「お願い、ここで死にたくない」

必死の様子で言う彼女はそれでも無表情だった。イオはそこにかつての自分を見たような気がした。

「乗ってしっかりとつかまれ。絶対に落ちるな」

ぶっきらぼうに言うと、少女は身軽にフィックに跨り、イオの腰に腕をまわした。イオは剣を抜くと、フィックのわき腹を蹴った。駆けだすとすぐに、こちらに向かっている精霊の集団にぶつかった。その集団は明らかに様子がおかしい。いつもの無害そうな顔からは考えられないほど、その顔は醜かった。目は赤黒く光り、大きく開かれた口には鋭い牙が並んでいた。そして狙いは、イオにしがみつく少女に間違いなかった。

イオはひたすら剣を振り回した。きりがないのはわかっていたが、そうするより仕方なかった。目の前に次々と現れる醜いもの。熱い身体の中のどこか冷静な部分で、イオは悲しみを感じていた。

（何がどうなっているのだろう。この国はどうなるのだろう）

頭の中で、さっき出会った男の言葉が甦っていた。

（この国が転覆する、か。あながち、正しいのかもしれないな…）

愛国心などないと思っていた。だが、イオは悲しかった。だからイオは、長き繁栄を築いた国が滅んでいくその末路が自分には哀れに映る、そのための悲しみだと思うことにした。

気がつくと、殺気がなくなっていた。追ってくる気配もない。それでも速度を緩めずに欠け、城を出てからゆっくりとフィックを止まらせた。あたりを見回したが、もう何も漂ってはいなかった。イ

オは静かに剣を鞘におさめた。
「大丈夫、もう大丈夫だから」
いまだにイオの腰にまわした腕の力を抜こうとしない少女に、できるだけ優しく言った。それでも彼女の腕は緩まなかった。すがるようにして、安息を求めているのだ。
「…少し俺に付き合ってもらえるか」
困ったイオが振り向きもせずに尋ねると、背にもたせかけられた頭が頷くのが伝わった。それを了解の意と解して、イオはフィックに合図をした。フィックは小走りをして、高い城壁を軽々と飛び越えた。そして、疲れを感じさせない足取りで、どこまでも続く草原をひた走りに走った。これは、イオとフィックの一番好きなことなのだ。特に、嫌なことがあったらこれほど効果的な憂さ晴らしはなかった。
夜が明けるような様子はなく、満天の星が頭上も背後も、地平線の果てまでも埋め尽くしている。地平線の先には、平和な村があり街がある。そのすべての統治を王が行っていた。そして今夜、その王が消えた。イオの目の前で闇に呑みこまれた。今でも王の手の感触をイオの手が覚えている。絶対的な力をもつ王が生を求めてイオの手にすがりついたものの、神々の前で王はあまりに無力だった。
（悲しい）
しかし、何が悲しいのかわからない。身を切るような冷たい風が心地いい。この風が心のもやもやも吹き飛ばしてくれているように思った。だが、実際にそんなことはありえないのだ。この気持ちが何なのか、決着がつかないうちにこの国は荒れるだろう。一人残された王女に何ができるというのだろう。
月のない冬の夜、イオはただ風になりたいと願っていた。

大地揺れる（後書き）

初めての執筆でいたらないところも多々あったと思いますが、読んでくださってありがとうございます…！

空染まる

数年前の春。イオはディティーク帝国のはずれにいた。アルタシオ帝国の溝から山一つ越えたあたりで、この辺はずっと山がちな地形が続いている。イオはいつものお気に入りの場所にフィックと一緒にやって来ていた。そこは山の麓で、川のせせらぎが微かに聴こえた。この季節になると、ここは辺り一面黄色い小さな花でいっぱいになる。風が運んでくる新芽の香りを嗅ぎながら、花の間を行き来する虫を見るのが好きだった。

ただ一つ、去年までの春とは大きな違いがある。山裾の広いとはいえない草原に、三人の男と三頭の恐竜の姿が見られるようになった。彼らは数日前から現れ、槍や弓の訓練をしているようだった。最初は山賊の類だろうかと思ったが、それにしては身なりがきちんとしすぎている。なんにせよ、イオはひどく興味が湧いた。自分以外に、恐竜と行動をともにする人間を見たことがなかったからだ。彼らがいなくなる日没まで、イオは一か所から動くことはなかった。

イオはどうやら捨て子らしい。少し前までは本気で恐竜の子供だと思っていたが、この年齢になると、たまに行く街の親子を見て、さすがに気付いたのだ。寂しい、とは思わなかった。それとも、寂しいという言葉を知らなかっただけなのだろうか。フィックの親がイオにとっての親で、フィックは親友であり兄弟だ。幼いころはフィックの親がとってきた果実を食べ、見よう見まねで火のおこし方を覚えてからは、とってきてもらった肉や魚を焼いて食べた。生肉も食べられないわけではなかったが、あまり好きではない。

イオという名前は、いつのまにか名乗っていた。名乗る相手などいないのだが、せっかく覚えているのだから使っていた。フィックという名前はイオがつけた。自分だけ名前があるのは不公平だと思ったのだ。自分を捨てた親がつけたであろう名前など、使う義理はないとも思わなくもなかったが、別に恨んでいるわけではない。き

っと、そこそこ幸せな毎日を送っているからだろう。
眺めていた三人組は、今から昼食にするようだった。一か所に集まり、談笑しながら座った。恐竜たちも一緒である。一人の頭と思しき男だけが座らず、山の方へ歩き出した。イオはただずっと見ていた。フィックが木の新芽を食べ始めても、まったく動こうとしなかった。
―イオ、人間が来たよ。
思いもよらない言葉に弾かれたようにフィックを見ると、彼は木立の奥を見つめていた。そこに突如として現れたのは、あの頭らしき男だった。
「やあ、ここはなかなか良い場所だな」
悠然とした動作で木立を抜けた男は、涼しい瞳でイオを見た。度肝を抜かれたイオは目を丸くするばかりで、フィックはイオに身を寄せながら警戒していた。
「ずっと君のことが気になっていたんだ。私も座っていいかな」
三十代の精悍な男は穏やかに言った。イオは人間の言葉も大方理解できた。警戒しながらも好奇心に負けて頷いた。人間に友好的に話しかけられたのは初めてだった。男は少し離れたところに座ると空を仰いだ。その横顔には大きな傷跡がある。
「その恐竜とは長い付き合いなのかい」
男はイオとフィックを見比べながら尋ねた。イオが頷くと男は微笑んだ。
「そうか、それはいいな。彼らは勇敢で美しい。私にも恐竜の友がいる」
知っている。大きくて逞しい恐竜だ。ここで毎日男たちを眺めていたイオは知っていた。
「何を…しているの」
おそるおそるイオは言葉を口にした。人に対して話しかけたのは、これが初めてだった。男は意外そうに、でも嬉しそうにイオの問いに答えた。

「見ての通り、ここで腕を磨いている。人も来ないし、広い。それに何より、恐竜たちがこの自然を喜ぶからな」
ここまで言って、男は一呼吸置いた。遠くから、二人の男の笑い声が聴こえる。
「私は馬ではなく、恐竜を扱う軍隊を作りたい。作って他国を武力で制圧したいのではない。我が母国を守りたい。あの国は危険だ」
その表情は真剣で、瞳はどこか遠くを見ていた。彼が言った国がアルタシオ帝国であるということは後にわかる。男はすぐに親しみやすい笑顔をイオに向けた。
「とはいえ、まだ私を含めて三人なんだが」
イオとフィックはただ男を見ていた。不思議な人間だ。目が離せなくなる。男は立ち上がって歩み寄り、イオの前でしゃがんだ。フィックは数歩後ずさりしたが、イオは動かなかった。
「名前を教えてほしい」
男の目がまっすぐイオの目を見た。イオはしっかりと見返した。
「イオ」
男は一度静かにまばたきをした。そして真剣な声音で言った。
「イオ、私とともに来ないか」
身も心も震えた。名前を呼ばれた喜びに、仲間となれる喜びに震えたのだ。イオは力強く頷いた。今思えば、寂しかったのだろうと思う。人の温もりが欲しかったのだ。
あの黄色い花の群れが、今も目に焼き付いている。

目を覚ますと、木目の天井が目に入る。ここは、特別隊にあてがわれた小屋の寝室。すぐに起き上がることができず、イオはぼんやりと天井を見つめた。
（城の裏手を駆け回って…娘がフィックから落ちそうになって城に戻った…気がする）
しばらくの間、曖昧な記憶の糸を手繰り寄せていたが、このまま

では再び眠りに落ちそうだと思い、上半身を起こした。清潔な白いシーツがやけに眩しく感じた。
全身の筋肉が強張っているのを感じながら、適当なシャツとズボンに着替え、伸びをした。そして洗面所で顔を洗い、居間へ行くためにドアを開けた。
「おはようございます」
いつものように言うと、テーブルについていたナギノが苦笑した。
「早いどころか、もう夕方だぞ」
そんなに眠っていたのか、と自分でも呆れた。それにしても、ナギノの雰囲気が違う気がする。イオはナギノをまじまじと見た。その視線の意味を解したナギノは、自分の黒髪に触れた。
「昨日の騒ぎで火を使ったときに、自分の髪を焦がしちゃってね。格好悪いから切った」
確かに、今までカナタと同じように肩まであった髪が、イオより短くなっていた。とはいえ、ナギノは自分の容姿にはさほど興味もないらしく、平然としていた。もっとも、似合っていたのだが。
「カナタさんとの見分けがつきやすくていいですよ」
イオが言うと、「そうだな」と微笑んだ。そして、小刀を磨く作業を再開した。
喉が渇いていたイオは台所へ行き、水を持ってナギノの正面に座った。この部屋は居間であり、台所であり、会議室なのだ。男所帯のわりにこの小屋が綺麗なのは、ほかでもない、几帳面なナギノのおかげである。あとは、たまにイオが手伝うくらいで、カナタとアロットはまったく家事はしなかった。厳密に言えば、ナギノがさせなかった。
「他の人は？」
イオが尋ねると、ナギノは手を休めずに答えた。
「隊長は城へ行く、と言っていたかな。カナタはリティナ様と神殿へ行った。用心棒だそうだが、それは口実だろうな。ここにいてもらってもうるさいだけだし、リティナ様に連れて行っていただいた」

リティナとは昨夜救出した王女の名前だ。王女は巫女でもあり、特別隊には不可欠な存在である。特別隊が精霊を斬れるのは、巫女が清めた布を額に巻いているからなのだ。
「アロットはリティナ様の護衛を買って出なかったんですか」
意外そうな口ぶりでイオが問うと、ナギノは眉間に皺を寄せた。
「いや、アロットはまだ眠っているんだ。外傷はないが、相当疲労しているようだ。ベッドはイオの隣なのに気付かなかったのか」
「え、はい。俺がぼんやりしてたんだと思います。…様子、見てきます」
別のコップに水を入れて、イオは寝室に戻った。すると、上半身だけ起こしているアロットと目が合った。アロットは弱弱しく笑った。
「無事でよかった、イオ」
イオは自分のベッドに腰掛け、持ってきた水を差しだした。アロットはそれを受け取り、一気に飲み干した。
「君は案外気が利く。ありがとう」
そう言ってアロットはいつものように目を細めてみせたが、どう見ても顔色が悪かった。もともと色白だが、今日は青白い顔をしていて、かかる金髪のせいで余計に痛々しく見えた。
「大丈夫なのか。かなりきつそうに見える…」
「正直、大変だったよ。溝から次々と奴等が出てきて追いまわしてくる。私ももてたものだ。隊長が来てくれたから助かった。火を使えばよかったんだが、髪や服を焦がしたくなかったからね。そう言ったら、かなりお怒りを買ったが」
アロットは飄々と言ってのけたが、悪夢のような夜だったに違いない。精霊はあの悪魔のような形相でアロットを追いかけたのだろうか。イオは溜め息をついた。
「俺が国境に行けばよかったな」
イオが続けようとするのをアロットが遮った。
「君に心配してもらえるなら本望さ。最近、心配だったんだよ。私

のことを大切な友人だと思ってくれているかどうか」
「……」
謝ろうと思ったことを後悔していると、アロットはさらに笑みを深めた。
「それにしても、年頃の娘さんを二人も助けたという名誉は羨ましいかぎりだな。おいしいところを持っていったものだ」
まるきりいつもの調子であるアロットに、イオは溜め息をついた。
「心配して損した」
そして立ち上がると、ドアへ向かった。
「ナギノさんにアロットが起きたことを伝えておくよ」
寝室から出ようとすると、アロットが呼び止めた。
「あの娘のもとへは君が行くといい。連れ回して悪かった、とね」
イオはばつが悪そうに頷くと、まだ顔色の優れない友人を残して居間に入った。

空は茜色に染まって、城を金色に輝かせていた。改めて今は夕方なのだと再認識して、少女の姿を探した。彼女の姿は意外と早く見つけることができた。小屋の隣にある井戸の近くに少女は立って、一人で夕陽を見ていた。夕陽に照らされて、背中で波打っている長い髪が光っているように見えた。どう話しかけたらいいものか、イオがぐずぐずしていると、イオに気付いた少女が近付いてきた。そして、ぎこちない笑顔で言った。
「昨夜は助けてくれてありがとう」
面食らったイオは思わず目を逸らした。
「いや。それより、昨日は連れ回して悪かった」
アロットが言っていたことをそのまま言っている自分を情けなく思いながらも、少し感謝した。そういえば、異性とこんな風に話すのは初めてかもしれない。
「楽しかったからいいの。あんな体験は初めてだった」
相変わらず、彼女はぎこちなく笑った。それはイオがよく知ってい

る、笑い慣れていない人のする笑顔だった。どうしてあんな所にいたのか尋ねようかと思ったが、やめることにした。今はまだ尋ねてはいけないような気がした。しかしそうなると、話題のないイオは困った。仕方なく、なんとか口を開いた。

「名前は？」

すると少女は驚いたような表情をした後、嬉しそうに言った。

「ミリア」

「いい名前だな」

イオが短く言うと、ミリアは心底嬉しそうにした。すると、突然昨日も感じた懐かしい気配がミリアから強く感じられた。花の香り。それは芳香とは少し違う。そうではなくて、花の気配、さりげないながらも確かな生命力が感じられた。

「そろそろ小屋に戻った方がいい。夜になると、また現れるかもしれない」

空は常に変化し続ける。黄金色の短い夢の時間は終わり、深遠な闇の時が刻々と迫っている。闇は悪ではない。長く自然の中で暮らしていたイオは、身を隠してくれる夜闇に何度救われたことだろう。しかし、今は違う。夜は精霊の、神々の領分になりつつある。イオが覚えたのは、静かな怒りだった。

ミリアは緊張した面持ちで頷いてから、躊躇いがちに言った。

「あの、あなたの名前も知りたい」

そう言われて、イオは初めてミリアの目をまっすぐ見た。ミリアの瞳は、ナギノのものとは違う、深い緑色をしていた。

「イオ」

それだけ言って背を向けると、ミリアがついてきながら「イオ」と呟くのが聴こえた。

「喉が渇いたなあ…。ナギノ、水が欲しい。今日の晩飯、味が濃くなかったか」

「文句を言うなら自分で作ってくれ。俺とイオの苦労を知るにはそ

れが一番だ」
　うっと言葉に詰まったカナタは、渋々自分で水を取りに来た。イオはいつも通り、おいしかったと思っている。そもそもカナタとアロットは、いつもあれだけ喋りまくって、ちゃんと味がわかっているのか怪しかった。
　この小屋は本当に居心地の良い住まいである。居間兼台所として使っている大部屋と、左右に二部屋ずつ。小部屋はそれぞれ、寝室、隊長室、物置、そして空室。その空室は昨夜から、リティナとミリア使っている。男ばかりの家だから装飾品こそないものの、木造であるこの小屋は、人をほっとさせることができた。冬は暖炉の木のはぜる音が、より効果的にひと時の安らぎを演出した。
　もともとは城の庭師が使っていたものを、王が命じて特別隊のために改築させたのがこの小屋だった。本当は城内に特別隊の部屋を設けるつもりだったらしいが、貴族や他の官吏の反発が大きく、こうせざるを得なかったのだ。王は不遇を許してくれと謝ったが、特別隊としては城内に住みたいわけではなかったので、かえって好都合だったのだ。
「隊長、今夜は見回りに行かなくていいんですか」
　イオが食事の後片付けをしているナギノを手伝いながら尋ねると、隊長は苦笑した。
「その仕事はリティナ様に取り上げられたようだ。昨夜から今日にかけて、リティナ様は神殿にこもって、自分の髪と血を捧げられたそうだ。だから、しばらくは精霊も姿を現さないだろうと仰っていた。嬉しいことだが、少々複雑だな」
「へえ…」
　リティナの姿が見当たらないのは、どうやら部屋で休んでいるからのようだ。ミリアも部屋にこもりきりだ。それにしても、イオは内心驚いていた。王女の力を疑うわけではないが、人外の力を人が操っていることに、ただ驚いていた。
「あの綺麗な藤色の髪を何の未練もなくばっさりと切ってしまって

…。勿体ないなあ」
カナタが残念そうに言うと、アロットがすかさず言った。
「それでも凛とした美しさはご健在だ。いや、むしろ増したかな」
「抜け目ない奴だな」
イオが呟くと、隣のナギノが皿を拭きながら笑った。
「あいつは貴族はやめたと言っていたが、そんじょそこらの貴族より、よっぽど上手く社交界で立ち回れると思うがな。まあ、そんな人間が隊にいるのは嬉しいことだ」
意外にも、ナギノはアロットを高く買っているらしい。ナギノはイオを見てさらに笑った。
「イオはわかりやすいな。今、意外だと思っただろう。表情には出ないが、雰囲気でわかる。アロットみたいな奴等に言いくるめられるなよ」
褒められているのか、けなされているのかよくわからなくて、イオは曖昧に頷いた。と、そこへアロットが来た。もう体調は良いらしく、顔色もよかった。
「大丈夫ですよ、ナギノさん。イオには私がおりますから。それにイオの場合、そこがかわいいとご婦人方や妙な連中の間で評判なんですよ」
「…昨夜も似たようなことを言ってなかったか」
イオとアロットがナギノを挟んでわいわいしていると、そこへカナタも来た。
「じつはナギノも、人相は悪いが堅物だというギャップがいいと、娘さんの間で評判なんだ」
「カナタより高評価なのは当然だ」
ナギノがふふんと笑うと、カナタは「この性格の悪さ、どう思う」とイオに囁いた。広いとはいえない台所に、男が四人集まっているというのはなんとも奇妙な光景である。
「見苦しいから戻ってこい。作戦会議だ」
見かねた隊長が苦笑して言うと、四人はぞろぞろとテーブルに集

まり、自分の席についた。ナギノとカナタは決して向かい合って座らない。自分の顔を見ながら食事はとりたくない、との主にナギノの意見である。
「昨夜の件でしょう」
カナタが真面目な声で言うと、隊長は頷いた。イオが隊長と出会ってから数年経つが、まったく老けたようには見えない。しいて言えば、思慮深さが瞳の色に増したことぐらいだろう。
「昨夜のあれは、本当に予想外の出来事だった。原因も目的もわからない。確かなのは、アルタシオ帝国の王が消えてしまったことだ。…イオ、謝る必要はないぞ」
委縮していまったイオに、隊長は優しく言った。そうは言われても、責任は感じるものである。胸の内で静かに溜め息をついた。
隊長は静かな口調で続けた。
「大切なのはこれからだ。いいか。今はまだ、国内外問わず、王の消失は伏せてある。知っているのは我々とリティナ様だけだ。言うまでもないが、絶対に口外するんじゃないぞ。でもまあ、いずれ皆の知るところとなるだろう。そうなれば、我が国最大の混乱が起こる。民は絶望して反乱を起こし、貴族は王位を狙ってリティナ様を陥れようとする。他国はここぞとばかりに我が国へ攻め込む」
アロットは眉をしかめた。
「リティナ様を妻とすることで玉座につこうとする貴族は多いだろうな。もう一つ、あり得る例を挙げれば、リティナ様を暗殺というのも考えられなくもない」
男たちは一斉に難しい顔をした。アルタシオ帝国に残された王家の人間はリティナだけなのである。リティナの母親は病で早くになくなり、父である王は今回の件で消えてしまった。夫妻にはリティナ以外の子はおらず、前々からリティナの夫の地位をめぐって水面下では動きがあった。また、王には弟がいたらしいが、彼は異国に追放されていて、生死さえわからない。よって、アロットの言ったことは十分にありえるのだ。王家が滅び、新しい統治者が現れやす

い環境が今なのだ。
皆が黙りこむなか、ナギノがきっぱりと言った。
「しかし、国内で揉めている場合ではない。他国がこの機会を見逃すものか」
アルタシオ帝国は長い間、他国との交流を絶っていた。なぜなら、国内の生産だけで需要に応えられていたし、古き良き文明の国という自負があったからだ。とはいえ、西のサーモリス帝国とは海賊問題を通じて、それなりに良好な関係を築いている。しかし、北のディティーク帝国とはほとんど関わりがない。故に、何をしてくるかわからず、恐ろしい。
「そうは言っても、北と西には溝があるし、南と東は海。溝は人間に越えられるような規模のものじゃないだろう」
カナタが言うと、隊長は首を横に振った。
「いや、その認識は甘い。私は以前、ディティーク帝国にいたが、あの国は科学と発展の国だ。最近新しい王が即位したが、どうやら大の新し物好きらしい。王家の保護する研究所が多々あって、そこではいつも新しい試みがなされている。だから、私たちには想像もつかないような技術を持っているだろう。もしかしたら、あの溝を超えることもできるかもしれない」
皆がますます難しい顔になった時、イオは思わず口を開いた。
「研究所？」
「ああ、アルタシオ帝国では聞き慣れんかもしれんがな」
隊長の言葉を聞いて、イオは考え込んだ。
（昨夜の怪しい男、研究所と言ってなかったが。花の乙女と研究所に来い、と）
イオは意を決して、男との会話のことを話した。イオが会議で発言するのは珍しいことである。少し緊張しながら反応を見ると、四人は驚きと不審の入り混じった顔をしていた。
「誰だ、それ。協力者と考えるには怪しすぎるな」
カナタが言うと、アロットは首を傾げた。

「花の乙女、という愛称の令嬢は知らないな。では、侍女のことだろうか。でも、私は侍女もよく知っているつもりだったんだが…」
「これを口実に夜遊びを増やそう、などと考えるなよ、アロット。それにしても、イオがからかわれたという可能性も含めて、その男はかなり怪しいな。しかも、研究所というからにはディティーク帝国の人間かもしれない。国境付近に不審人物はいたか」
ナギノが問うと、アロットは首を横に振った。そもそもあの混乱の中、不審人物を見つけるのは難しいだろう。
大きな問題が目前に並んで、正直どうしたらいいのかわからない。しかも、その問題は一国の存亡をはらんでいる。慎重でなければならないが、迅速でなければならない。
隊長が沈黙を破った。
「ナギノとカナタは港に行って、海賊から情報を仕入れてこい。必要ならサーモリス帝国に行ってくれ」
二人は嬉しそうに頷いた。なぜなら、彼らは海賊や商人などの相手が得意だからだ。得意分野を任されて、嫌な顔をする者はいない。二人はアルタシオ帝国から見て遥か北西にあるリッツ島の生まれで、そこは海賊の島である。二人は商人の息子であり、海賊の一員だった。それからどういう経緯か、特別隊の最初の隊員となったのであった。
「私とイオ、アロットは城の警備とリティナ様の護衛をする。イオの出会った怪しい男も気になるが、花の乙女が誰なのかわからないし、信憑性があるのかはっきりしない以上、少し様子をみよう」
イオとアロットが素直に頷くと、隊長は「よし」と笑った。特別隊がリティナと接触することを大臣などがよく思わないのは明らかだったが仕方ない。それに何と言っても、アルタシオ帝国の軍隊は、長く平和が続きすぎたせいなのか、まったく頼りにならないのだ。
「じゃあ、今日はこれで解散だ。さっさと寝るんだぞ」
カナタとナギノは本当にさっさと寝室へ向かってしまった。とはいえ、早朝から動きまわっていたようなので無理もない。逆に、さ

っき起きたばかりのイオとアロットの目は冴えていた。
「さて、酒屋にでも行こうか」
信じがたいアロットの誘いにイオが呆れていると、隊長がたしなめた。
「お前たちも早く寝なさい。特にアロットは病み上がりだろう」
「それより隊長こそ疲れてないですか。寝てないのでは」
イオが言うと、隊長は苦笑した。そして立ち上がると、大きな手でイオの頭を撫でて自室へと行ってしまった。二人は立ち去る隊長の後ろ姿を見送った。
「…俺は怒らせたのか？」
ばたん、とドアの閉まる音を聞いてから、イオは不安そうにアロットに尋ねた。
「まさか。妬けてしまうくらい、君は愛され上手だな」
上機嫌に言うアロットに、イオは肩を竦めてみせた。
「わけのわからない奴だな。え、本当に酒屋に行くのか。酒ならここにもあるだろう」
手をひらひらさせて、小屋を出て行こうとするアロットを、イオは慌てて呼び止めた。ゆるく一つに束ねられた美しい金髪が背で揺れている。
「いや、昨日の騒ぎで夜はしばらくどこの店も閉まっているだろう。私は神殿に行ってくるよ」
「待て、いくらなんでも危ない。俺も行く」
イオが剣を持って駆け寄ろうとすると、振り向いたアロットが目で止めた。
「一人で行かせてくれたまえ。逢瀬を楽しんでくるから」
「は？」
呆気にとられるしかないイオを残して、アロットは深紅のマントを羽織って出て行ってしまった。
（本当に…わけのわからない奴）
イオは溜め息をついた。そして、友人が残した嫌な胸騒ぎに薄々

気付いたのだった。

星流れる

きらびやかに飾り立てた人々。贅を極めた豪華な装飾の数々。この国で最も華やかであろう雰囲気。イオはげんなりとして、充満した香水の匂いに酔いながらもなんとか立っていた。くるくると踊る人々を見ていると気分が悪くなって、床ばかり見ていた。ぴかぴかに磨き上げられた大理石の床に、イオの顔がはっきりと映る。眉間の間に寄せられた皺まで見えた。すると、隣に立っていた隊長がイオに声を掛けた。

「イオ、大丈夫か。気分でも悪いんじゃないか」

「いえ」

短く返事をして顔をあげる。今日はリティナ王女の誕生祝いの宴で、イオたちはリティナの護衛という大役を与えられた。他の武官が不服そうにしながらも文句を言わなかったのは、数日前の騒動以来、すっかり尻込みしているからである。

隊長は当初、この宴を催すことに反対していた。なぜなら、王が出席しないのを皆が不思議がるだろうし、リティナに言い寄る連中が後を絶えないだろうと思ったからだ。それに加えて、父を亡くした娘の心痛を考慮してのことらしかった。しかし、リティナは気丈に言った。

「宴を催さない方が不審がられます。父は病で臥せっていることにします。私なら大丈夫」

そうして、リティナに押し切られる形で、今夜の宴が実現しているのである。

実際、リティナは今、銀のドレスに身を包み、少し高いところから階下を静かな瞳で見下ろしていた。その姿は、余裕さえ感じさせるものである。

「そうは言っても顔色が悪いぞ。ミリアもだ。少し風に当たってきなさい」

イオがちらりとミリアを見ると、なるほど、具合が悪そうだ。ミリアは素性が知れないため、特別隊の小屋で生活している。よくわからない人物のため、リティナと同部屋にするのはいかがなものかと議論したが、どうやらリティナは彼女の事情を知っているらしく、同部屋を使うことを快く許した。今夜は小屋にひとり残すわけにもいかず、男装をさせて特別隊の一員として警備にあたっているのである。ちなみに、リティナが特別隊の小屋で生活することに関しては、侍女たちから大反発があったが、リティナが説き伏せたようである。

ミリアが耐えられないようにホールの入口へ向かったため、イオも追わざるをえない。

外に出ると、夜の冷気が心地良かった。イオが一つ息をつくと、それを溜め息と思ったのか、ミリアが謝った。

「ごめんなさい。人混みは慣れなくて…」

「いや、俺もうんざりしてたから」

そう言うと、ミリアは安堵したようだった。彼女は長い髪を束ね、イオの昔の制服を身につけている。男たちの中でイオが一番小柄なのでイオの古着があてがわれたが、それでもミリアには大きそうだった。

「アロットは人気者だね。女の子がたくさん」

「ああ。奴は大貴族の息子だから。三男とはいえ、肩書きとしては申し分ない」

理由はそれだけではない。アロット自身に人をひきつける魅力があるのだ。だから、三男とはいえ、ファイデリー家の後継者として有力視されている。それだけに、特別隊といえどもアロットを冷遇する貴族はごくわずかだった。

まだ寒さは続いているが、確実に春へと近付いている。風が優しくなった。そのせいか、空に浮かぶ月や星もいつもより暖かく光って見えた。

「リティナも大変だね。こんなにたくさんの人にお祝いされて。私

だったら逃げたくなると思う」
　ミリアはなぜか、リティナに敬称をつけない。最初は皆驚いたが、当の本人たちがさも当然のような顔をしているので、誰も何も言わなかったし言えなかった。今でも違和感がある。
「あの日、ミリアはどうしてあんな所にいたんだ？」
　あの事件の日、城の奥まった部屋に一人でいたミリア。イオは思い切って聞いてみた。ずっと問いたかったが、憚られるものがあって躊躇っていたのだ。
「よくわからない。気付いたらあの部屋にいて、イオが来たの」
　ミリアは事もなげに答えたが、イオは余計に意味がわからなくなった。
「さらわれてきたのか」
「ううん。よくわからない」
　どういうことだろう。イオはここ数日、言葉を残した男を忘れられず、そのことばかり考えている。そして、ミリアと関係があるかもしれないと思った。というより、他に考えられなかったのだ。
「花の乙女、と呼ばれたことは？」
「ないと思う」
「そうか」
　これ以上問うても無駄だと思い、イオは口を閉ざした。背後から聞こえてくる音楽の調子が変わった。イオは気だるさを感じて、腕を組んで大扉に身をもたせ掛けた。
「イオはどうしてあんな所に来たの？」
「俺が城内の警備の担当だったからだ」
　イオが答えると、ミリアは首を振った。
「そうじゃなくて、どうして私のいるところがわかったの？私は自分でさえどこにいるのかわからなかったのに」
「なんとなく…俺はずっと自然の中で育ってきたから、そういう勘は鋭いんだ」
　どう説明していいかからず、イオは曖昧な口調で言った。あなが

ち間違いではない。が、「草木の気配がした」とは言いにくかった。そこでイオは、ふと思いついた疑問を口にした。
「もしかして、緑の多い所で育ったのか」
「うん」
短い返事ではあったが、その笑顔から嬉しさが伝わってきた。きっと幸せな日々を送っていたのだ。それなのに、なぜ城にいたのだろう。疑問は消えなかったが、本人がわからないと言っている以上、どうしようもなかった。
「こんばんは」
不意に聞こえた声が自分たちに向けられたものとわかり、イオはそちらに目を向けた。するとそこには、若い二人の青年が口元に笑みを浮かべて立っていた。一人は見知らぬ青年だったが、もう一人は知っている。アロットの幼馴染である。
「そちらは新入りかな」
その青年は探るような目をしていた。笑みを浮かべているものの、そこに好意を見出すことはできない。
「ええ、まあ」
警戒しながら答えると、青年は今度は本当に愉快そうに笑った。
「そう。女性さえ隊に加えるとは、王がいなくなって仕事が増え、人員不足なのかな」
それだけ言うと、夜空のような紺色のマントを翻し、ブーツの音を高らかに鳴らしながら二人は行ってしまった。彼と一緒にいた青年はよく意味がわかっていないようだったが、嫌味な笑みをイオに向けて去った。イオは苛々しながらも、頭の中で彼の言葉を反芻していた。
「王がいない…」
ミリアが小さく呟いた。彼女もイオと同じ違和感を覚えたらしい。ミリアもあの事件に関わった者として、ある程度のことは知っているのだ。あの青年が言ったその言葉に、一体どれほどの意味が含まれているのか。そしてもし、王の消滅を指すものであったとしたら、

なぜ知っているのか。拭いきれない不安が胸に立ち込めてくるのを感じた。

（あれは…シャルクじゃないか）

踊り終えた娘の手の甲に口づけをしながら、アロットは幼馴染の姿を見つけた。長身であるシャルクは目立つ。それでなくても、シャルクはいつもその長い髪を束ねないので分かりやすかった。

「あの、どうかなさいましたか」

手を握られたままの娘が少し動揺したように言った。その頬はかすかに紅く染まっている。アロットは視線を娘に戻した。

「いえ、この小さな手を離しがたくて」

いつものように微笑みかけると、娘は明らかに動揺した。まだあまりこのような場に出たことがないのだろう。ありきたりのやり取りを真に受けている節がある。

「しかし私はあくまで仕事中。つまらない男と思わないでいただきたい。また縁があれば、小さな花の君」

面倒なことになる前に、とアロットは踵を返した。特別隊といえどもアロットは政治の一端を担う大貴族の子息。今は若くやんちゃなだけで、いずれ家に戻ると思われているらしい。様々な家の娘がアロットのもとにやって来る。面倒ではあったが、アロットはいちいち相手にしていた。情報を集めるにはそれらの娘から聞き出すのが一番早いからだ。

アロットは歩きながらシャルクの姿を探した。シャルクのことは嫌いではない。高飛車な口をきくが、それはあまり気にしないことにしている。家の格式の高さがアロットより低いため、強がっていることが分かっているからだ。もっとも、ファイデリー家より高い格式をもつ家などないのだが。アロットはシャルクを、互いに認め合った者とみなしていた。そのため、近頃顔を見ていなかったので声をかけようと思ったのだ。

「シャルク」
アロットが名前を呼ぶと、幼馴染は足を止めて振り向いた。強気な目がアロットを射た。彼はいつもそのような目をしていた。
「久しいね。今しがた、君の友人に会ってきたところだ」
「イオのことか。どうせまた、嫌味を言ったのだろう。あまり意地悪をしないでやってくれ」
葡萄酒の入ったグラスを渡されながら言うと、シャルクは自分のグラスを空にしてから口を開いた。
「何度も聞くようだが、どうしてあの者たちと共にいる？言いたくないが、君は誰にも引けをとらない大貴族だ。その血統も能力も。君がどう思っているのか知らないが、イオとかいう奴はあまり賢くない」
アロットはグラスを回しながら苦笑した。
「ひどい言われようだな、イオは」
「それでは答えになっていないな。君はいつもはぐらかす」
期待してはいなかったが、と付け加えてシャルクは壁にもたれた。そんな幼馴染を横目で見て、アロットは問うた。
「で、誰がどこまで知っているんだ」
アロットの問いに、シャルクは呆れたように答えた。
「僕に聞いてどうするんだい。本当のことを言うと思う？君の家系は祭祀だろう。神にでも聞けばいい」
「生憎私は神より人間の方が好きでね。君の口から聞きたい」
「……それは大貴族ファイデリー家の人間としての命令か」
「まさか」
にこやかなアロットの端正な顔をしばらく見て、シャルクは溜め息をついた。命令だと言ってくれた方が話しやすいのに、この男は絶対にそれをしない。しかもシャルクにだけ。学生時代からそうだった。
「こういう情報は、上流であるほど伝わりにくいものなのだろうね。王が行方不明であることは、もうほとんどの貴族の当主や子息が知

っている。何人かは神や精霊の関わりを疑っているようだ」
「ふーん……」
考え深げに顎をさわるアロットにシャルクは皮肉めいた笑みを向けた。
「そして君は僕に何も教えてくれはしないのだね」
「安心したまえ。君だけを仲間外れにしてはいないし、そもそも貴族の世界で仲間外れになっているのは私だろう。ほら、シャルク、あそこの娘が君を見ているよ。評判の悪い私と話しこんでいては君に申し訳が立たない。嫌われ者は消えるとしよう」
ぺらぺらとそれだけ言葉を紡ぐと、アロットは背を向けた。金の竜。恐竜を御する特別隊に入ってから、貴族たちの間でアロットはそう呼ばれていた。質素で地味な特別隊の軍服さえも、彼が着ると違って見える。格が違うのだ。ファイデリー家の兄弟の中でも彼の輝きは群を抜いている。何人たりとも彼を追うことも、ましてや蹴落とすことなどできはしない。
（それでも、僕だけは君に跪きはしない。追ってみせる）
もう見えないアロットの姿が見えるかのように、シャルクは人込みを見つめ続けた。

「さて、そろそろ戻るか」
戻りたくはなかったが、いつまでもリティナから離れているのもどうかと思い、イオは言った。ミリアは素直に頷く。
（やはり男には見えないか）
先ほどのシャルクの言葉を思い出しながらミリアを見た。イオでさえ男とは言い難いと思うのだ。
「戻らないの？」
動こうとしないイオにミリアが不思議そうな顔を向けた。イオは我に返り、慌てて歩を進めようとした。腕に鋭い痛みが走ったのはその時だった。

「……っ？」
腕を押さえながら周りを見回しても、優雅に宴を楽しむ人々しか見えない。それでも腕に刺さった針を抜きながら、イオは鋭い目で周囲を探る。
「イオ…それは一体…」
イオの異変に気付いたミリアは、イオの手に握られた針と苦痛に歪むイオの表情を見て息を呑んだ。そんなミリアにイオは厳しい口調で言った。
「騒ぐな。気を付けろ」
相手が何者か分からない以上、逃げろということもできない。しかもこの針は恐らく飛び道具。どこから飛んでくるか分からない凶器からミリアを守るのは難しい。イオはミリアを背に庇いながら壁際に寄った。こうすることが唯一ミリアを守る方法だった。
とはいえ、相手を野放しにするわけにもいかない。この会場には名だたる貴族も、リティナもいる。標的はいくらでも考えられ、可能性として最も高いのはリティナだ。どうしたものか思案していると、今度は腿に針が突き立った。今更だが、この針には毒が塗ってあるらしい。腕が痺れてきている。
（どうしたら…せめて隊長に伝えなければ…）
しかし気持ちとは裏腹に、腿にも痺れが襲ってきて、立っていることも難しくなってきた。
「イオ、私が隊長に伝えに行くから…！」
背に庇っているミリアが必死の声を出す。状況を理解することができたのだろう。きっとそうしてもらうのが最善なのだと思ったが、イオは動けなかった。相手の狙いがミリアであるような気がしてならなかった。そうでなければ、これだけ上手く身を隠せるのだ、わざわざイオに気付かれるような行動をせずとも標的を狙える。
「ミリア、走るぞ」
ということは、自分たちが逃げれば相手も追ってくるのではないだろうか。痺れと痛みで思うように動かない身体に鞭打ち、イオは

ミリアの腕を引っ張って外に出た。案の定、後方から芝生の上を走る音がする。どうやら二人組らしい。
「俺の前を走るんだ」
イオに引かれるままになっているミリアを前に押し出した。ミリアは目を丸くして振り返る。
「振り向くな！」
半ば怒鳴るように言うと、ミリアは躊躇いながらも前方に顔を向け直した。もしミリアを後方で走らせていたらそれこそいい標的だ。それに、今はイオよりミリアの方が早く走れるというのが事実だ。
ミリアの背中が遠くなる。二人組の足音が近付いてくる。全身に回り始めた毒がイオの身体を蝕む。
「くそ…っ」
二人組がイオを追い抜いたらどうするのか。誰がどうやってミリアを守るのだろう。ここは例え数刻でも自分が足止めするしかない。
イオは立ち止り、抜刀した。汗が全身から噴き出していた。この時初めて、自分たちを追っていた人物を見た。男と女。男は金持ちそうな商人の姿を、女はコックの姿をしていた。男は驚いた顔をしてイオを見た。あまり人の命を狙う人間にはふさわしくないような、人懐こい顔立ちだ。女は呆れ顔で腕を組んでいる。そして、男に目配せして走り去った。間違いない、ミリアを追ったのだ。
「待て！」
女を追おうとすると、男が歩を詰めてきた。舌打ちしながらイオが剣を構えると、男は複雑そうな表情で身構える。まだ若い男だ。ナギノやカナタとそう変わらない年齢だろう。
イオが剣を突き出すと男はひらりとそれをかわした。そのまま剣を薙ぐと、それも男は難なくかわした。何度同じことを繰り返しただろう。イオは焦りと怒りを感じていた。この男は明らかに時間稼ぎをしている。決して攻撃してこない。イオを足止めしている間に、あの女がミリアを狙っているのだ。
（どうしたらいいんだ、俺は）

疲労と毒で混濁してきた意識の中で、イオは思った。しかし何の考えも浮かばない。
その時だった。背後から爆音のようなものが聞こえた。そしてその音はどんどん近付いてくる。
「そいつを止めろ！」
あのミリアを追った女のものと思われる声がした。イオと対峙している男にむかって怒鳴っているらしい。しかし、イオは振り向くことができなかった。男に隙を与えることになるし、もうそれほどの体力さえ残っていなかった。前方からは男が、後方からは爆音が接近してくる。もう何も考えることのできないイオには、その一瞬がひどく長く感じられた。

気付いた時には何か乗り物に横たわっていた。激しい振動と大きな音で気分が悪い。事態を理解できないイオは、身体を持ち上げようとした。しかし、身体が言うことを聞いてくれない。ただ、見知らぬ男が運転しているのは分かった。
「誰だ、何をしている」
イオは頭だけを持ち上げて尋ね、剣を手探りしたが、何も掴めなかった。
「気付きましたか」
男はイオの方をちらりとも見ずに言った。風になびく髪は黒に近い灰色で、黒いローブを着ている。イオは、そのローブを記憶の中に見つけた。
「お前はあの夜の……」
「ご名答。覚えていてくれたんですね、お久しぶりです」
相変わらず男は前方から目を離さなかったが、その声は嬉しそうだった。相当な速度で走っているこの乗り物は、どうやら一筋縄の運転ではいかないらしい。
「お前にはずっと聞きたいことがあった。でもその前に、どうして俺がお前と一緒にいるんだ。お前はあいつらの仲間か」

「……」
「聞いているのか」
「……」
何も答えない男に苛立ったイオは、拳で乗り物を殴った。本当は男を殴りたかったが、身体が持ち上がらないから仕方ない。
「乱暴だな。壊れたらどうするんですか。後で答えるから待ってください。そもそも、逃げなきゃならないのは君たちなんだから邪魔しないで」
拗ねたような口調で男が言った後、後方から穏やかな声が聞こえた。
「この人は大丈夫」
イオはそちらに顔を向けたが、背もたれに阻まれて声の主が見えなかった。しかし、そこにいるのがミリアだということは分かった。ミリアはもう一度繰り返した。
「この人は大丈夫」
「そうか……」
不思議なことに、イオは簡単に納得してしまった。ミリアが何の根拠をもって言っているのかもわからないのに。考えてみれば、ミリアだって何者かわからないのに。ミリアの声にどこか労わりを感じて、イオは持ち上げていた頭を下した。眠ろうと思った。まず体力を取り戻さねば何もできない。
目に入ったのは満点の星空。冬の清廉な夜気の中、その輝きは一層美しかった。そして、イオは静かに目を閉じたのだった。

星流れる（後書き）

随分と間が空きましたが、続きです。
次話からはもう少し間隔を詰めます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4070k/

ＦＬＯＷＥＲ

2010年10月8日22時25分発行